

## 「左目の異世界」

高橋桐矢

セミの声がふってくる、夕暮れの公園。

ひとり、ブランコをこぐ。前に後ろに。

このまま、どこかに行ってしまいたい。

地面に影が長くのびている。お母さんとケンカして、何も持たないで飛びだしてきてしまった。でももう家には帰らない。帰りたくない。お母さんのわからずや。わたしがいなくなつて心配すればいい。

「斉藤まりかさん、どうしたの」

声に、おどろいて足をつく。ふりむくと、5年2組の担任の、鈴木先生がいた。ブランコの後ろに。いつのまに。

「もうとつくに5時を過ぎてるよ。家に帰らなくちゃ」

だまつて、首をふる。鈴木先生は、今年の春、転勤してきた、暗くてジミなメガネの男の先生だ。

鈴木先生が、ブランコの横に立った。鈴木先生の影とわたしの影が、ならんで長くの

びている。

「帰りたく……ないのかな？」

わたしは地面の影を見ていた。鈴木先生の影の手が動いて、メガネを外した。家になんて帰らない。夏休みの宿題を一日忘れたくらいで、あんなに怒るなんて。

「どうしても帰りたくないのなら」

鈴木先生の言葉に、ふっと横を見たわたしは、そのまま動けなくなった。

メガネを外した鈴木先生が、じつとわたしを見ていた。

片手で、前髪をちらとかきあげた。初めてちゃんと顔を見た気がする。長い前髪とメガネで、かくれていた顔。

見開いた先生の目は、そこなし穴みたいに、真っ黒だった。

「わたしの左目の中に来ないか？」

背中がぞくりとあわだった。

「どういうことですか」

先生は、さらに片手をそえて、左目を、大きく、いっぱいに見開いてみせた。

「わたしの左目は、異世界につながっているんだよ。ほら、見てごらん」

さからえなかった。すいこまれるように、立ち上がったわたしは、先生の左目をのぞ

きこんだ。

先生が腰をまげて、中腰になって、わたしが背伸びして。先生の左目をのぞきこむ。そこには。

わたしがいた。黒い、真つ黒な瞳の中に、わたしが、不安そうな顔をして、映っていた。わたしは、はっとして飛びのいた。

先生は、白い歯を見せて、ニコリと笑った。……先生の笑顔を初めて見た。教室では、つまらなそうな顔でだまっているか、下をむいて、ぼそぼそとしゃべるだけだったのに。力がぬけそうになって、わたしはブランコのくさりにしがみついた。

先生は、笑顔でうなずいた。

「見えただろう？」左まゆをきゅっと上げて。「わたしの左目の中には、この世界と左右が反対で、あとはそっくり同じな世界があるんだよ。左目の中は、信号の青が右で、赤が左にある。字は右から左に書く。心臓は右に、肝臓は左に。斉藤さん、ぼくの左目の中の世界ではきみの目の下のほくろは左にある」

わたしははっとして右のほおをおさえた。一歩さがって、先生を見上げる。先生が左目を指さす。

「この向こうでは、時計は左回りに動き、太陽は西からのぼり東にしずむ」

先生の黒い瞳は、ぬれたように光っている。

「斉藤さん、ここじゃないどこか、ちがう世界に行きたいって思ってただろう？」  
先生が一步近づいた。

「斉藤さんは、いつもそうだったよね。教室でもひとりでいることが多かった」  
先生の瞳から目をはなせない。

「わたしはずっと、見ていたよ。きみが『行きたい』と言えば、それだけで左目のとびらは開く」

ブランコのくさりを持つ手に力をこめた。

先生の瞳の中の、わたしが見える。

瞳に映った、左右反対であれば全て同じわたし……。同じ……。じゃない！  
瞳の中のわたしは、顔をゆがめて、さげんでいる。

——ここに来ちゃだめ！

一瞬で、つめたい氷をあびせられたような気がした。

つかんでいたブランコのくさりをも、思い切りふりまわす。

「あっちに行つて！ 来ないで！ わたしはそんなところに行かない！」  
その瞬間、先生の顔が悲しげにゆがんだように見えた。けれど、気のせいかもしれな

かった。

わたしの前に立つ先生は、5年2組の教室にいたときと同じように、冷やかな表情をしていた。

「そう。残念ですが、それならしかたありませんね」

先生はポケットからメガネを取り出して、かけた。もう、どこからどうみても、いつもと同じ鈴木先生だった。その左目に……異世界があるなんて信じられない。

先生は、くるりと背を向けると、そのまま歩きさっていった。

わたしは、ブランコのくさりにつかまったまま、立ちつくしていた。

行かなくてよかったんだらうか……？

その思いは、とつぜんの呼び声で中断された。

「まりかー！ まりかー！」

ふりむくと、公園の入り口をお母さんが走ってくるころだった。

「お母さん！」

かけよつてきたお母さんは、泣きそうな顔をしていた。

「心配したじゃないの！」

お母さんに手をひかれながら、わたしは後ろをふりむいた。公園の反対側、先生が向

かったほうへ目をむけた。

そこにはもうだれもいなかった。

お母さんが手をぎゅっと強くにぎった。

「どこかに行ってしまうかと思っただわ」

どこかに行ってしまうところだったのだ……もしかしたら……。

それが、夏休みに入ってすぐの出来事だった。お母さんとわたしは仲直りして、そして、お盆には、田舎のおじいちゃん、おばあちゃんちに行つて、スイカを食べて、花火をした。

肩を叩いてあげたら、おばあちゃんが目をうるませた。

「まりかちゃん、本当に元気に大きくなってよかった。ゆりかちゃんもきつと、よろこんでくれているわ」

「ゆりかちゃん……って？」

「ゆりかちゃんはね、あなたのお姉さんなのよ」

おばあちゃんが教えてくれた。わたしと双子のゆりかちゃんは、生まれたその日に亡くなつてしまったこと。そして、わたしとそっくり同じ顔のゆりかちゃんは、目の下のほくろだけが、反対側にあつた、ということも。

わたしは、鈴木先生の左目の中の女の子のことを思い出していた。9月になって始業式の日、学校に行くと、鈴木先生が来ていなかった。教頭先生が教室に来て言った。

「鈴木先生は、つごうで、遠くの学校に行くことになりました」

それから、鈴木先生を一度も見かけていない。

あれは、夢だったのだろうか。

それとも……。

おわり